

教育課程編成委員会
2025年度第1回委員会 議事次第

1. 日時および場所

日 時:2025年11月19日(水) 18:00~20:00
場 所:161教室

2. 出席者

委員一覧 ※敬称略

Aグループ

倉方俊輔、田中義久、岸下真理、小池祐也
山下裕貴、鍵谷啓太、角野峰生、釜友知與子

Bグループ

西濱浩次、湯浅桂輔、中村裕輔、小林希、井上哲史
見邨佳朗、廣辻雅之、山本順也、井上嘉亮

Cグループ

山内裕輔、吉松吾朗、槇村吉高、田邊晋治
野瀬孝男、谷川博康、堤下隆司、広瀬一樹、上杉敬史

3. 配布資料

- ・2025年度第1回委員会 議事次第
- ・委員一覧表
- ・教育課程編成委員会に関する規程
- ・2024年度(昨年度)卒業展リーフレット

4. 議事次第

- (1) 開会挨拶
- (2) 委員紹介
- (3) 議事内容
 - 1) 全体会議
本校の設置学科や特長について説明
各科のトピックス紹介(見邨・鍵谷・野瀬)
 - 2) グループ討議(建築2グループ、土木とガーデン1グループに分かれて)
「これからの専門学校の役割とは」
 - 3) 「卒業展2025」の審査について
- (4) 次回開催日時等の決定
日 時:2026年2月13日(金)18:00から
場 所:129教室
内 容:2025年度各学科課程修了報告
その他

以上

2025第1回教育課程編成委員会 議事録

日時:2025年11月19日(水) 18:00~20:00

場 所:161教室

出席者: 上記のとおり ※欠席者:内倉氏、作本氏(敬称略)

開会挨拶(見邨)

進行より、本委員会の趣旨と配布資料などの説明と開会の挨拶(山下理事長)が行われた。

委員紹介(見邨)

出席した委員および関係教職員から自己紹介を実施。教員もその後自己紹介。

議事(進行)

1)全体会議

本校の設置学科および特長について説明。

各学科の教育内容、特色、今後の教育方針などについて説明。

取り組みや教育改善などに関する方向性など説明があり、委員から質問・意見が出た。

(2)各科のトピックス紹介

建築(B、R、N)建築(A)・土木(CF)・ガーデン(G)各分野における近年の取り組みや学生の学習成果、プロジェクト事例などを紹介。(見邨・鍵谷・野瀬)

委員より、実施教育、学内外で活動した地域連携・産学連携などの紹介した内容などの質問や意見また賛同などが出された。

2)グループ討議

(建築2グループ、土木+ガーデン1グループ)

※各グループにて実施。(議事録別紙)

3)「卒業展2025」の審査について(見邨)

卒業展の実施概要・審査方法について進行より説明。

委員には当日の審査協力を依頼など説明をおこなった。

4)次回開催日時等の決定(見邨)

日時:2026年2月13日(金)18:00から

場所:129教室

内容:2025年度各学科課程修了報告など説明。

文責:山本

分科会議事録

A分科会(議事:角野)

【委員】倉方俊輔、田中義久、岸下真理、小池祐也

【教職員】山下裕貴、鍵谷啓太、角野峰生、釜友知與子(敬称略)

議論内容

議論は主に、1. DX/テック & DX、2. Society(社会)、3. Human/キャリア形成の順に進められました。

1. DX(デジタル・トランスフォーメーション)と実務

- 専門学校の立ち位置: 修成建設専門学校は、大学との比較において職業教育を行う場所という立ち位置です。
- DXの役割: DX(BIMやAIなど)は、現場をより高度にし、人間がすべきことに専念するためのツールである、という認識が共有されました。デジタルがすべてを逆転させるような「頭でっかちな話」になってはいけません。
- 万博とデジタルツイン: 大阪・関西万博は、すべてをデータ化しデジタルツインを作り運用や解体後の再生につなげることが行われるとされています。しかし、万博の成功は、データ化ではなく、実際の職業人として現場で意識し、判断し、行動できる人間力があってこそ成立したのが大前提であるとの見解が示されました。
- BIMの現状と課題:
 - 以前はCADが最先端だったが、今はBIMをやって当然という世界になりつつあります。
 - 特に施工分野では、計測においてメジャーやコンベックスだけでなく点群データで測っていくことが当たり前に近い状況です。
 - 委員の事務所では、BIM導入を検討したが、思い通りに動かない部分があったため導入を見送っている状況もあります。
 - BIMが建築事務所のような「表現するもの」にとって有利になるか疑問が示され、積算においては、切り上げ・切り捨てといった「見えないところ」が表現できず、正確性に疑問が残るとの指摘がありました。
 - 積算業界におけるBIM化の進展はそれほど進んでおらず、完璧なデータを作るためのデータ入力(インプット)が大きな問題となっています。現状は、軸部の積算への転用や仕上表からのデータリンクなど、一部の有効利用にとどまっています。
- アナログと教育: 現場は基本的にアナログであり、アナログも発展させた上でのデジタルというのが本質です。学生には、手で描き、手で覚える建築を手で考える教育が非常に大事であり、学生時代にしかできないこととして重視すべきです。
- リバーエンジニアリング: iPhone Proなどでも高精度の3D点群データが作成できるため、特に改修やリノベーションの分野では、既存建築をリバーエンジニアリングしていくための学習が重要であると認識されています。
- 学生の利用実態: 学生は2Dから入らずいきなり3Dモデルを作る傾向があり、図面がちゃんとしたものにならない「作った感」に陥りがちで、真の意味でのBIM利用に至っていません。BIMはうまく使えるところだけ学んでおくべきです。
- 大学との比較: 大学では基本的にBIMは導入されていません。大学は施工分野を視野に入れていない傾向があります。
- AIの活用: AIはいずれ積算をするようになるかもしれません。学校はAIの使用を否定せず、AIの正しい使い方を学ぶことを求めており、人間が決定するための下調べや可能性のリサーチに活用すべきです。

2. 人材育成とキャリア形成

- 決定力の養成: AIやツールによって選択肢が多くなりすぎ、結論が出ないのが現代の問題です。プロは決定するからプロであり、学生には「決定をしろ」と指導し、その場で切る勇気と技術的な自信をつけることが重要です。
- 資格の重要性:
 - 専門学校は、資格取得をシステム化し、学生を活躍させるためのアドバンテージを提供すべきです。資格は実力であり、実務者として学ぶ場である専門学校において重要視されています。
 - 施工管理技士資格は、法改正により受験要件が大幅に緩和され、19歳から1級の受験が可能となりました。修成では、1年生の秋に2級、2年生で1級にチャレンジするよう推奨し、有料講習会を実施しています。ゼネコンは19歳で1級技士を取る学生を非常に歓迎します。
- 専門学校の役割再定義:
 - 専門学校は、大学との競合ではなく、相互補完的なバランスを取り、その意義を明確にすべきです。
 - 社会に必要とされている人材を育成し、その道を選んでよかったと思ってもらうことが正しい役割です。
 - 従来のような曖昧な教育ではなく、社会に役立つことを具体的に教えていくことが重要です。
 - 学生の個性を伸ばしてあげられる場所であるべきです。
 - 即戦力として、資格や表現能力といったスキルを、具体的な職業分野や将来と明確に結びつけていくことが専門学校の責任です。

3. 留学生と多様性

- 留学生の増加: 本校では留学生が増加しており、彼らは探求心が高く、実務を求めて日本に来ています。
- 多様性の価値: 多様な国籍の学生がいる環境は、日本人の学生にとって社会を学ぶ上で非常に貴重な機会を提供します。今後は多様性を強みとして生かせる教育への転換が必要です。

4. 会議後の追加コメント

- 修成の学生は「修成が好きだから」という理由で学んでいる学生も多いです。
- 大学と比べ、専門学校では先生と学生の距離感が非常に近く、クラス担任制などで距離が近くなります。

B分科会(議事:山本)

【委員】西濱浩次、湯浅桂輔、中村裕輔、小林希、井上哲史

【教員】見邨佳朗、廣辻雅之、山本順也、井上嘉亮(敬称略)

議論内容

1. 専門学校に求められる役割

- 専門学校は、実践的な技術・技能の習得に重点を置いています。
- 少人数制や個別指導など、学生一人ひとりに寄り添った学習支援が可能です。
- 即戦力の育成が魅力であり、資格取得など実践に近い教育ができています。点が評価されています。
- 学校での学びだけでなく、生活面・文化理解・進路支援など、総合的なサポートに対応できます。

- AIの活用は企業全体が取り組んでおり、学校での活用は有効で重要ですが、試験などの問題に対処が必要です。

2. 大学との比較

- 大学は知名度や教育スペックが高く、最新の教育・研究環境を整備展開しています。
- 専門学校と大学の役割の違いを明確化し、教育価値を再定義する必要がある、という提起がありました。
- 大学では得られにくい、職業直結型の学び・即戦力育成という強みをどう発信していくかが課題です。
- AIを活用した学習は展開されていますが、学校側の対応が急務です。
- 学生のコミュニケーション能力や適応能力、学力に差があることも議論されました。
- 専門学校の良さを出すために、資格支援や学習サポートなど専門分野の活用を強化すべきです。

3. 留学生への対応

- 留学生の増加に伴い、地域や社会生活など、求められる教育や支援のあり方が変化しています。
- 専門学校は、体調や生活面のサポートを含め、学びやすい環境づくりがしやすい利点があります。
- 留学生は、学習習慣、背景知識、日本語能力の差が大きいため、学びの質の確保が重要です。
- 文化の違いや言語力に関するコンプレックスなど、様々な面で留意が必要です。
- 教室内外でのサポート体制を強化し、学習到達度などへの対応が必要です。
- 学習や生活面での丁寧なフォローを通じて、成功体験を積む機会の提供や、様々な状況で自信を回復・向上させることが求められています。

C分科(議事:上杉)

【委員】山内裕輔、吉松吾朗、榎村吉高、田邊晋治、

【教職員】野瀬孝男、谷川博康、堤下隆司、広瀬一樹、上杉敬史(敬称略)

議論内容

土木工学科、建設エンジニア学科、ガーデンデザイン学科のカリキュラムや学生状況について説明が行われ、その後、質疑応答形式で議論されました。

1. 求められる人材と資格

- 土木分野: 1級、2級土木施工管理技士、舗装施工管理技士が必要とされています。
- 造園分野: 造園施工管理技士が必要であり、ステップとして2級を取得し、最終的に1級を目指してもらいたいという意見がありました。会社としては、技能士よりも施工管理の方が重きを置かれています。
- その他: 造園分野では、造園施工管理技士補をまず取得して入社してくれると助かるとの意見や、ビオトープ管理士、樹木医の下地となる知識があれば良いとの意見がありました。
- 知識: ドローンやDXなどでプログラミングの知識があれば良いと感じる、という意見もありました。

2. 在学中の実習と現場見学

- 測量実習：新入社員には測量ができていない者がいるため、測量実習に力を入れるべきであり、レベル、トータルステーションの据え付けから使用まで取り組むべきです。学生には、現場の一連の流れがわかるようなイメージを持って入社してもらえるような経験が求められます。
- 造園実習：フィールドワーク等で街路樹を見て学ぶことや、植物は生きていることを感じ、意識を持ってもらうことが重要です。
- 測量教員：造園分野でも測量は必要だが、教える教員がいない状況もある、という課題が挙げられました。

3. 建設業界のIT化、デジタル化

- 情報化施工/DX：建設業界では情報化施工が取り入れられています。AI、遠隔操作、無人化にも取り組んでおり、国交省からも遠隔操作で作業する現場も出てきています。
- IT活用：アスファルト合材の品質管理(リアルタイムでの温度確認)にITを活用する取り組みが進められています。iPadなどの活用はされているが、全員が使いこなしているか、セキュリティ面で課題があるとの指摘がありました。
- ドローン：現場によっては毎日ドローンを使用して土量分析もしています。ドローン操縦のための資格取得(国交省)も進められています。
- ドローン資格：2等無人航空操縦士の資格取得について、現時点(2025年)ではまだそこまでの需要は考えていないため、必須とは言えず、希望者のみで良いという意見が優勢でした。

4. 留学生への要望

- 留学生には日本語能力試験N2の取得が求められています。
- 国籍は気にせず、やる気を重視するとの意見もありました。

5. インターンシップ

- 企業側の受け入れ日数は、関西圏では1日のみの場合もあるが、一般的に2日間から3日間程度が妥当であるとの意見がありました。